

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 11 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370801

研究課題名(和文) 近世の肥料商と農業経営

研究課題名(英文) Manure Merchants and Farm management in The Tokugawa Period

研究代表者

白川部 達夫 (Shirakawabe, Tatuso)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：40062872

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：日本の近代化の農村的基盤として多肥多労働型の商品的農業経営の発展が注目されたが、近年はその実証的蓄積がほとんど見られなくなった。本研究では、これらの実態の解明を目指し、大阪府下を中心に農業経営帳簿など関係資料の収集を行うとともに、その基礎分析を行った。史料が大部なので分析に手間取ったが、目標とした摂津武庫郡上瓦林村岡本家の帳簿分析に着手できた。また伊勢中央部の天保期の農業経営と肥料の実証分析を行った。さらに、これまでの研究をによって、19世紀前半の肥料商と地域市場の展開を総括した。

研究成果の概要(英文)：It was the development of the agricultural products that was fundamental to the modernization of Japan. In this study, I am going to analyze the relationship between agricultural products and the manure. For this purpose, I have collected documents which are related with the farming account books around Osaka and analyzed them carefully. As a result, I have accomplished the analysis of the account books of the Okamotos' which was located in Nishinomiya-shi, Kamikawarabayashi Village. In addition, I have analyzed the relation of the farming and the manure in the Tempo period in the Ise Central Part. Furthermore, by adding results of past studies, in this article, I have discussed the development of manure dealers and the local markets in the early 19th century.

研究分野：日本史

キーワード：肥料 農業経営 干鰯 鯰粕 粕

1. 研究開始当初の背景

日本近世近代の移行期において、農業経営の中からブルジョア的発展の可能性を追求した戦前・戦後の研究は、干鰯・麦粕、鮮粕などの購入肥料の多量投下による木綿・菜種作などの特産物生産が発展した事実を明らかにした。戸谷敏之『近世農業経営史論』(日本評論社、1949年)古島敏雄・永原慶二『商品生産と寄生地主制』(東京大学出版会、1954年)などが代表的な成果である。ことに古島敏雄らは、大坂近郊木綿生産地帯で肥料直段の高騰と木綿など農産品価格の低迷による天保期における転換(挫折)を指摘し、特権的都市株仲間商人や肥料商人の前期的商業高利貸し資本のブルジョア的発展への吸着を強調した。一方、山崎隆三『地主制成立期の農業構造』(青木書店、1961年)などは明治の松方デフレ期まで、西摂津の木綿作地帯ではブルジョア的富農経営が存在したことを明らかにし、挫折論の限界を指摘した。しかしこれらの研究では、肥料については史料の制約のため概略的にふれられるに過ぎなかった。古島敏雄らのテーゼは大坂市中の問屋仲間の肥料価格の変化と繰り綿直段の対比で導かれたに過ぎない。山崎の検討した西摂津の氏田家の経営帳簿も購入場所と支払い総額が年次的に記載されているだけである。この面でもっとも優れた摂津国武庫郡上瓦林村岡本家の帳簿は詳細な記述があるが、今井林太郎・八木哲浩編『封建社会の農村構造』(有斐閣、1955年)の分析は、ごく概括的で、基礎的数値が推計されたものであった。

その後、1990年代になって肥料流通については原直史『日本近世の地域と流通』(山川出版社、1996年)中西聡『近世・近代日本の市場構造』(東京大学出版会、1998年)が出、さらに2000年代には石井寛治・中西聡『産業化と商家経営』(名

古屋大学出版会、2006年)中西聡『海の富豪の資本主義』(名古屋大学出版会、2009年)など優れた研究が出た。これらにより、魚肥問屋仲間や全国流通については飛躍的に研究が進んだ。しかし在地の肥料商人や消費者である農民との関係、いわゆる肥料消費市場についてはほとんど研究がないのが現状である。近年、岡島永昌「大坂から大和への肥料流通」(『ヒストリア』213号、2009年)荒武賢一朗「一九世紀近江湖東地域における魚肥流通」(『市場史研究』29号、2010年)など研究が出たが、これも流通状況の解明にとどまっており、消費市場の検討は行われていない。この点では、荒居英次「近世農村における魚肥使用の拡大」(『日本歴史』264号)が、包括的指摘をしたことから出ていない。荒井は年利40%を越える肥料商人の高利の前貸し、出来秋の現物支払いと農作物の安値引き取りという前期的資本の性格を強調しているが、その主たる史料は18世紀のもので、また経営分析から導かれたものは、ほとんどない。荒居の見解は寄生地主制批判の基調を引き継いだもので19世紀については一部引用史料に問題があることを指摘した。申請者は『江戸地廻り経済と地域市場』(吉川弘文館、2001年)において利根川中流域(中通り)における幕末肥料商人の経営分析を行い、幕末期には荒居が主張したような前貸し・出来秋現物決済、高利貸しなどは行われず、現金販売を中心に、掛け売りとなった場合も年利12%であった事実を指摘した。またこの地域では仕入れでも直売のスポット商売が行われたことも明らかにした。これらの問題を深めつつ、平成18~19年には科学研究費補助金・基盤研究C「近世肥料商人の基礎的研究」の申請を行い研究を進めた。その結果、まったく史料がないとされていた畿内先進地域・西摂津の肥料商史料とし

て、尼崎・梶屋文書を発見した。またこれに関連して上瓦林村岡本家文書の公開が進んだので、農業経営帳簿の肥料購入分を分析した。摂津・上瓦林村岡本家の分析では、享保～天明期までは岡本家の経営は干鰯代の支払いが滞るなど困難な状況にあった。八木哲浩は同家の利潤の上がる時期を宝暦期としているが、これは同年の経営帳簿に前年分の菜種の販売が含まれて二年分の収益があったため、寛政期にならないと肥料代を支払って利潤が出ることは難しかった。一方、文政末から天保初年には、岡本家は手作りを縮小して地主化するが、この時期、肥料代の高騰のため利潤が圧迫されたとする八木の分析も、肥料代を国訴の訴状の肥料代高騰を訴える価格を固定して利用しており、実態を計算してみると、かなりの利潤があったことがわかる。したがってブルジョワの手作りから地主化への論理を別の角度から説明する必要があることが明らかになった。平成20～22年まで「近世後期の特産地と肥料商」のテーマで科学研究費補助金・基盤研究Cの交付を受けた。このなかで梶家の分析が完了して論文化できた。天保期以後に限られるが、畿内肥料商のはじめての経営分析である。ここでは尼崎の肥料商は兵庫を中心に大坂から干鰯・鯡を市場の動向に応じて購入したこと、また安政期には干鰯から鯡への魚肥の変化が見られるが、海岸部の新田地域では干鰯の需要が根強くあり、鯡への転換が一律に進んだわけではないこと、また販売圏は従来の綿作地帯から海岸部の米作地帯への変動が見られたこと、肥料価格では高騰があったものの、木綿・菜種・米の販売価格と比べると従来いうほどの打撃ではなかったこと、などが論点としてあがってきた。さらに阿波の大藍師であった三木屋与吉郎家の肥料購入の分析を行い、特産地と全国市場のかかわりを明らかにした。また関東の

主穀生産地帯である下野都賀郡西水代村田村家をめぐる肥料流通の分析を通じて、江戸と並ぶ関東の干鰯集散地でありながら従来史料の欠如からまったく不明だった関宿干鰯問屋と在地肥料小売商の取引実態を明らかにした。平成23～25年、科学研究費補助金・基盤研究C「近世後期の肥料商と地域市場」では、大坂干鰯屋仲間であった近江屋長兵衛とその分家市兵衛家の史料を分析し、いままで史料がないとされていた大坂干鰯屋の実態研究をはじめて行った。近江屋長兵衛家では手形を使った仲間取引の様相や大坂周辺や阿波への肥料販売の状況が明らかになった。また近江屋市兵衛家文書では、長兵衛家になかった経営帳簿の分析を行い文政・天保期の大坂の問屋仲買の取引の実態を明らかにした。さらに関東後進地域でも天保期以降、販売手形が使用されるなど、市場が非人格的なものに変容しつつあったことを指摘した。

2. 研究の目的

以上の肥料商、市場研究をふまえて、本研究では、主として近世後期の畿内を中心に農業経営との関係を検討することにした。これについては摂津武庫郡上瓦林村の岡本家文書でかつて文政期分だけ分析したことがあるが、今回は享保期から残る全体について分析を目指した。この帳簿は「万覚帳」と題名がつけられているが、調査を進める過程で、各地で同題名の経営帳簿があることがわかった。畿内には同題名で経営帳簿をつけるリテラシーがあり、それは現在の調査では伊勢にまで広がっていたことがわかる。内容はそれぞれ違うが、収穫や肥料購入などの記載があることが多く、それをもとに比較検討すれば、畿内各地の肥料と農業経営の検討は可能であると考えられる。本研究開始前には貝塚市の要家文書、高槻市の松村家文書、三重県鈴鹿市の服部家文書などを調査中であったが、この撮影を進

めて畿内を中心に農業経営と肥料の関係を新しい水準で明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

まず摂津国武庫郡上瓦林村岡本家の万覚帳 100 冊余をエクセルにデータ化して、農業経営分析を行ことにした。なかに肥料購入記録があるので、享保期から天保期頃までの、指標的データが得られる。並行しながら、畿内を中心に万覚帳の収集や比較的容易な各家のデータ化を行う計画とした。その上で、岡本家との比較を行いながら、畿内農業の展開と肥料との関係を総括して、課題の解明につなげる。ほかに関東を中心に各地の農業経営史料と肥料との関係を示す帳簿を調査して、データ化することで、全体像が描けるようにする。ただし現段階では、畿内周辺がもっとも可能性が高く、阿波・播磨・近江などは肥料商史料がある程度確保できているので、これにかかわる農業経営史料の発見があれば、有効となる。史料のデータ化とともに学生夏期休暇などに調査を実施してこれらの史料の確保に努めることとした。

4. 研究成果

「近世後期伊勢の肥料と農業経営」、『東洋大学人間科学総合研究所』17号、2015年
近世後期の伊勢国河曲郡肥田村服部家の農業経営と肥料の利用状況について検討したもの。伊勢は近世では畿内に次ぐ生産力を持っていた。天保期の服部家の農業経営では鰯ノ粕と干粕が肥料の中心となり、米・菜種の二毛作地では畿内に近い施肥が行われていたが、二毛作率は半分程度で、この点で限界があったことを指摘した。

「19世紀前半の肥料商と地域市場」、『東洋大学』『東洋学研究』52号、2016年
従来、個別研究として行ってきた肥料商と地域市場の変容を展望したもの。これまで肥料商はともすれば商業高利貸し資本の典

型として、その側面が強調されてきたが、その実態の解明を通じて、19世紀前半には競合的市場の中で、前貸し利子なども低下し、高利貸しの側面は薄れ幕末の経済発展の中でこれに対応しながらダイナミックな展開を見せていたことを指摘した。

「享保・元文期の摂津の農業経営と肥料」、2017年2月

享保・元文期の摂津武庫郡上瓦林村の岡本家の農業経営について、収支計算を行ったもの。この時期、岡本家は、米作を中心とした経営で、木綿や菜種、空豆を商品作物として作っていたが、木綿作は武庫川の治水工事のため上瓦林村では不適合になり、縮小したのに対して、菜種作は岡本家はまだこの代替えになるほど作付けが進んでいなかった。これに年貢の重さや大庄屋としての負担も加わり、同家はこの時期、手作り収支に宛米収入を加えても支出超過だったことがわかった。肥料支出の経営に占める比重も高く、ことに元文金銀の改鋳後の高騰が目立った。これが元文期に行われた初期国訴の背景にあったことがうかがえる。当初の目標の入り口にたどりついただけであるが、それでも前提となる村の状況や年貢の分析など、分析枠組みが確立した意義は大きい。今後、この分析枠組みに沿ってデータ整理を行い、天保期までの帳簿分析を行いたい。

白川部達夫「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」(2)～(4完)2015年～2017年

(2)では大坂干鰯屋で明治期になって二代目大阪商工会議所会頭として活躍した近江屋田中市兵衛家の安政・文久期の経営分析である。近江屋市兵衛店は二代目が天保13年頃死亡して一旦閉店する。その後の再興事情や安政2年の再興直後の経営状況を明らかにした。(3)では近江屋市兵衛家の慶応3年～明治10年代までの買日記を分析して、その仕入れ状況を検討した。同家の仕

入れは明治 5、6 年がピークで以後次第に低下していったことが分かった。また拡大期には玉粕・糠なども仕入れ、魚肥商としての垣根を越えて仕入れが行われた。一方、買日記に現れない東京取引もあり、荷受け問屋的性格が認められた。(4・完)では慶応 3 年～明治十年代にいたる近江屋の肥料販売を検討した。近江屋の経営帳簿は、この時期、初めて仕入れと販売の両方がそろった年が続くが、仕入れの量目に対し、3～5 倍の販売重量があることがわかり、委託販売分がかなり含まれていたことが判明した。近江屋はこの時期、松前問屋や荷受け問屋から仕入れて、干鰯屋仲間に販売することを軸に、泉州、紀州の肥料商にも販売するなど問屋的な営業が中心だった。大阪周辺の農村などにも販売はしていたが、量的には大きな比重は占めなかった。近江屋の販売も明治 6 年がピークで、10 年代になると低調になったと見られる。近江屋市兵衛は明治 10 年代に第 42 銀行の頭取になり、新会社創立など企業経営者の性格を強めたため、肥料商にはあまり力を入れなくなったと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

白川部達夫「享保・元文期の摂津の農業経営と肥料」、平成 26 年度～平成 28 年度科学研究費補助金基盤研究(c) (課題番号 26370801) 研究成果報告書、2017 年、32～53 頁、査読なし

白川部達夫「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」(4・完)、『東洋大学文学部紀要』70 集史学科篇 42 号、2017 年、53～70 頁、単著、査読なし

白川部達夫「19 世紀前半の肥料商と地域市場」、東洋大学『東洋学研究』52 号、2016

年、145～156 頁、単著、査読なし

白川部達夫「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」(3)、『東洋大学文学部紀要』69 集史学科篇 41 号、2016 年、77～101 頁、単著、査読なし

白川部達夫「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」(2)、『東洋大学文学部紀要』68 集史学科篇 40 号、2015 年、111～129 頁、単著、査読なし

白川部達夫「近世後期伊勢の肥料と農業経営」、『東洋大学人間科学総合研究所』17 号、2015 年、145～162 頁、単著、査読有り

[学会発表](計 1 件)

白川部達夫「19 世紀前半の肥料商と地域市場」、19 世紀日本の地域経済と市場研究会、アメリカ合衆国、ボストン、ハーバード大学ライシャワー研究所、2015 年 9 月 4 日実施

[図書](計 件)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

白川部 達夫 (SHIRAKAWABE, Tatsuo)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：40062872

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()